

# タイのろう教育の発展 ——女性貴族ネットワークによる慈善事業から 国家社会事業へ——

西 田 昌 之

## 1. はじめに

タイにおいて手話には自然発生的に生まれた自然手話とろう教育によって導入されていったタイ現代手話（以下、タイ手話）とがある。タイの自然手話は、バンコク古手話、チェンマイ古手話、南タイ古手話、バーンコー手話<sup>1)</sup>などである。一方で現在、タイ国内で広く用いられているタイ手話は米国ギャロデッド大学<sup>2)</sup>で教育を受けたタイ人教員らによって整理、教育されてきた手話であり、米国経由のフランス手話系手話に分類されている<sup>3)</sup>。またタイのろう教育は、1951年に初めてろう教室が創設されたのを皮切りに、国立セートサティアン校やマヒドン大学附属ラーチャスダー校が主導して指導方法やカリキュラムを整備してきた歴史を持つ。

タイのろう教育史についてはこれまでに日本ではあまり紹介されていない。加藤三保子・本名信行がタイのろう教育事情を報告しているが、現地語資料を使用せず、主にタイ人のインフォーマントへの聞き取りに基づいているために、部分的な記述にとどまっている<sup>4)</sup>。そこで本稿では、タイのろう教育関係者の葬式本<sup>5)</sup>や論文、ろう者の著作といった現地語資料からろう教育に関与していった意図を明らかにすることを目的とする。またタイのろう教育は特に女性貴族たちのネットワークが支援し、発展してきた。本稿ではこのタイのろう教育の発展を古くからある女性貴族たちの慈善活動が福祉国家化するタイの社会事業に結び付けられ、動員されていく過程として理解する。さらにろう者がその慈善事業や社会事業の支援対象として、無力化されてきたことから脱し、自助・自立へと向かっていく現代までの動きを追う。

## 2. タイにおけるろう教育の開始

タイにおいてろう教育は、貴族階層に所属する女性たち、もしくは彼女たちに関連する慈善活動や団体との関係が深く、現在もなお積極的な関与が見られる。そこで、まず本節では、最初期にろう教育の創設に多大な貢献をした3名の女性と、1名の男性の貴族の関与の経緯について振り返る。

- (1) モムルワンラーチャーウォンイン・スームシー・ガセームシーによるタイろう教育の創設  
まずタイろう教育の創始者とされるのが、ラーマ四世の孫モムチャオパティパット・ガセ

ームシー (หม่อมเจ้าปวีพัทธ์ เกษมศรี) の娘、モムルワンラーチャーウォンイン・スームシー・ガセームシー (ม.ร.ว.หญิงเสริมศรี เกษมศรี) であり、1951 年教育省官僚としてタイで初めてろう学校を創設した (写真 1)<sup>6)</sup>。スームシーは当時バンコク西部にあったラーチャブリー州 (มอนตัน) の知事であったモムチャオパティパット・ガセームシーの末娘として生まれた。成人して教育省に入り、女性官僚となったスームシーは、米国ニューヨーク市のハンター・カレッジに留学し、その後 1948～1949 年にギャローデッド大学修士課程でろう教育法を修了した<sup>7)</sup>。1951 年に帰国すると、バンコク北近郊に位置する寺院ワット・ソーマナットの敷地内にあった第 17 テーサバーン校 (別名ワット・ソーマナット校) の一教室において、助手 2 名とともにタイで初めてとなるろう教室を開学した<sup>8)</sup>。

このタイ最初のろう学校は教育省や貴族の後押しを受けて設立された経緯もあり、好意的に受け取られ、貴族だけではなく、平民階層からも多くの入学希望者が現れた。当初 12 名の生徒に対して午前、午後 2 回に分けて<sup>9)</sup>、発話を目的とする口話教育を行った<sup>10)</sup>。学生数は急増し、開設後 6 か月間で 50 名を超えたという<sup>11)</sup>。そのため教室が手狭になり、施設を拡張すべく、スームシーは新聞や貴族社交界を通じて、積徳 (タンブン) として寄付を求めていくこととなった。



写真 1：モムルワンラーチャーウォンイン・スームシー・ガセームシー  
(ม.ร.ว.หญิงเสริมศรี เกษมศรี)<sup>12)</sup>

このラーマ四世に連なる女性貴族であるスームシーを活動の中心に据えることで、ろう教育を支援するために貴族たちのネットワークが急速に形成されていくことになった。その支援ネットワークの中心人物たちが、当時のタイ首相であったブレイク・ピブームソクラームの妻であり、女性活動家であったターンブーイン・ライアット・ピブーンソクラーム (ท่านผู้หญิงละเอียด พิบูลสงคราม) と、教育省次官のモムルワン・ピン・マーラーゲン (หม่อมหลวงปิ่น มาลากุล)、そして、彼らの支援によってスームシーと同じくギャローデッ

ド大学に留学し、2代目ろう学校校長となるクンイン・ガマラー・グライルック (คุณหญิงกมล ไกรฤกษ์) であった。

## (2) ターンプーイン・ライアット・ピブーンソクラームのろう者支援

プレーク・ピブーンソクラーム首相の妻ターンプーイン・ライアット・ピブーンソクラーム (以下、ライアット) は、先進的なタイの女性・社会運動家として知られており、政府の立場からろう者の支援に関与していった (写真2)。彼女がスームシーのろう教育活動を支援するきっかけは、1950年米国外遊中にスームシーの学位授与式に参列するためにギャロデッド大学を訪れた経験によるという<sup>13)</sup>。ライアットはその際にろう者であっても高等教育を受けることによって、専門的な職業につき社会発展に貢献する人材となっていく米国のろう者の状況を目の当たりにして衝撃を受けたという<sup>14)</sup>。

米国のろう者の若者たちはろう者であっても大学教育まで受ける機会があり、卒業後は良い職についているのを見た<sup>15)</sup>。

その見聞を基にして、帰国後にスームシーのろう教育を支援するために、1952年にろう者教育の支援者団体としてタイ国ろう者支援協会 (มูลนิธิธิดานุเคราะห์คนหูหนวก) を立ち上げ、その初代会長に就任した<sup>16)</sup>。それにより、ろう教育行政のカウンターパートとなり、財政的にろう教育を支える体制を整えた。



写真2：ターンプーイン・ライアット・ピブーンソクラーム  
(ท่านผู้หญิงละเอียด พิบูลสงคราม, 1903-1984) <sup>17)</sup>

### (3) 理解者としてのモムルワン・ピン・マーラーゲン

ライアットの女性・社会運動の良き理解者の一人であり、政治的な協力や人材紹介を惜しまなかった人物に、教育省官僚のモムルワン・ピン・マーラーゲンがいる。ピンはラーマ四世の孫にあたり、チャオプラヤープラサデットスレーントラーティボーディー(เจ้าพระยาพระเสด็จสุเรนทราธิบดี)の息子である(写真3)。教育大臣、文化大臣を歴任し、シラパコーン大学学長、チェンマイ大学設立準備委員長などを務めた。ピンは、ろう学校の創設に際して教育省の高官として便宜を図り、タイ国ろう者支援協会の会員ともなっている。また後に、当時部下の一人であり、2代目のろう学校校長となるガマラー・グライルックをライアットに紹介することにもなる。



写真3：モムルワン・ピン・マーラーゲン  
(หม่อมหลวงปิ่น มาลากุล, 1903-1995)<sup>18)</sup>

### (4) クンイン・ガマラー・グライルックによるろう教育の整備

最後にスームシーのろう教室を発展させ、実質的にろう学校として整備していったのが、クンイン・ガマラー・グライルック(以下、ガマラー)である(写真4)。ガマラーは、プラヤー・サクダーピデーチャウオーラリット陸軍大佐の長女であり、大学予科校(トリアムウドンスクサー校)で理事をしていたピンの下で、英語教師となるべく教員養成課程にいた。スームシーがろう教室を開設した頃に、ライアットはピンにろう教育を引き受けてくれる教員の紹介を要請しており、ピンがその候補の一人として引き合わせたのがこのガマラーであった。ガマラーはピンの推薦を受けて、タイ国元米国留学生協会(American University Alumni: AUA)によって、1952年フルブライト奨学生に選拔され、加えてライアットが会長を務めるろう者協会タイ国ろう者支援協会の奨学金も受けて、ギャローデッド大学修士課程に留学した<sup>19)</sup>。ガマラーは米国から帰国すると、1954年にスームシーの後任としてろう学校校長に就任した。



写真4：クニン・ガマラー・グライルック  
(คุณหญิงกมล ไกรฤกษ์, 1914–2000)<sup>20)</sup>

このガマラーのろう学校校長就任に伴い、まずタイ指文字の開発が行われた。指文字は手話の一種であるが、手話のように手と顔、上半身の所作によって言語の意味を形成するのではなく、指の形で文字そのものを一字ずつ示す手法である。ガマラーはギャローデッド大学への留学当時、学長エリザベス・ベンソン (Elizabeth Benson, 1904–1972) の下で教育を受けていた<sup>21)</sup>。ベンソンは、ガマラーがタイ指文字の開発を行うことを支援し、その結果として、米国指文字を基にしてガマラーが初めてタイ指文字表を作成した (写真5)。このタイ指文字表の制作には、タイろう学生も協力しており、指の絵はろう学校第一期卒業生ゲンノイ・トーンノイ (กุลน้อย ทองน้อย) が描いた。



写真5：ガマラー考案のタイ指文字表<sup>22)</sup>

ガマラー考案のタイ指文字は英語の音韻に従って作られているが、タイ語は英語に比べて子音・母音の文字数が多く、また声調記号・短縮記号などの補助記号を持つ。この複雑なタイ語をいかに表現するかが焦点となり、新たな指文字を開発する必要があった。ガマラーは、英語にはない規則を持つタイ文字に関しては、追加的な規則を定めて表現できるように工夫した。例えば、「๒」はタイ文字における「S」の発音を持つ複数の子音の一つである。そのために、「S」を示す米国指文字に「2」を示す指文字と組み合わせて、「S-2」と表現した(写真6)。

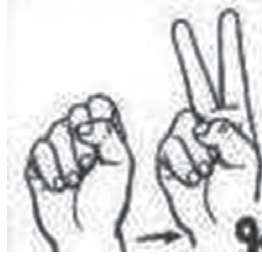


写真6：タイ指文字による「๒」の表現<sup>23)</sup>

このようにガマラーの在任期間には、口話主義から、口話、手話、指文字、文字を適宜に使用して教育するトータルコミュニケーションの導入が図られた<sup>24)</sup>。その成果として、1966年にはタイで初めてのタイ手話教科書となる『手話(ภาษาไทยมือ)』が教育省普通教育局特別教育部福祉教育課から出版された<sup>25)</sup>。

しかし、実際のろう教育において、手話のできる教員は不足しており、手話の教育利用は限られていた。ろう学校では手話ができないか、わずかな知識しか持たない健聴者の教員の監督の下で、ろう補助教員や年長のろう者が、寄宿舎での生活や校外活動を通じて、手話を教えていたという<sup>26)</sup>。健聴者の教員は手話を用いることがあっても、学生指導に必要な規律指示のための最低限の使用に留まっていたという<sup>27)</sup>。この意味において、ガマラー以降のトータルコミュニケーションの効果は限定的であり、現場のろう者指導者側の便宜的なコミュニケーションの運用が生み出した状況だったと推測される。いずれにしても、タイのろう教育の始まりにおいて、スームシー、ライアット、ガマラーらの貴族女性主導によってろう教育の枠組みが形成され、教育省のピンがそれらの活動に理解を示し、行政上の支援をしていく体制が整えられたのである。

### 3. 読み替えられる女性の積徳(タンブン)

このような女性貴族たちの活躍の中で、同時に女性たちの伝統である功德のための積徳(タンブン)は、国家社会事業への女性たちの貢献として読み替えられていった。積徳とは、寺や僧への寄進や慈善活動を行うことによって父母や一族、もしくは自分自身が死後に良い生まれ変わりができるように徳(ブン)を積む行為のことである。特に仏教教義の中

で、女性は男性に比べて前世の徳が少ないとされる。そこでより良い生まれ変わりができるように多くの積徳を行うことが、高貴な女性の模範的に行いとして文化的に奨励されてきた。そのために女性貴族たちは自らの家格、身分に応じて、競うように積徳を行ってきた。

ろう学校の設立においても、貴族女性から積徳として多額の寄付が行われた。当初、既存の普通学校の一教室を間借りしている状態であったろう学校は、1952年に一人の貴族女性の遺贈があり、敷地と建物を得ることになった。この寄付者がクンイン・トー・ノーラネーティバンチャーキット (คุณหญิงไต้ะ นรเนติบัญญัติ, 1872-1954) であった (写真7)。トーはスームシーの活動を新聞で知り、5ライ1ガーン (8,400m<sup>2</sup>) の土地と家屋、250万バーツの私財を寄付した<sup>28)</sup>。それによって、彼女と夫の家名を冠したセートサティアン財団を設立し、校名もセートサティアン校に改めた<sup>29)</sup>。これが現在の国立セートサティアン校 (โรงเรียนเศรษฐเสถียร) の母体となっている。



写真7：クンイン・トー・ノーラネーティバンチャーキット  
(คุณหญิงไต้ะ นรเนติบัญญัติ, 1872-1954)<sup>30)</sup>

ここでこの1952年にろう学校建設のためにトーが行った寄付についてトー自身がいかにかに説明し、さらにスームシーとライアットがいかにかに再解釈していったのかに注目する。スームシーはトーの篤い信頼を受け、直接病床で会話を交わしており、葬式本に残るスームシーが行った聞き取りの記録からはトーの家名への誇りが読み取れる。トーは、中国との貿易や移民を扱う港湾左局の官職にあったプラヤー・チョートゥグラチャーセーティ (ティアン) (พระยาโชฎีกะราชเศรษฐี (เสถียร)) の孫であった。夫のプラヤー・ノーラネーティバンチャーキット (ラット・セートブット) (พระยานรเนติบัญญัติ (ลัด เศรษฐบุตร)) は同じく貴族の家系であったが、1939年に亡くなった。夫との間に子どもはおらず、独り身であったが、数人の女性の養い子<sup>31)</sup>がいた。年老いて目が不自由になり、その養い子たちから介護を受けていた。その境遇の中で死期を前にして、彼女はろう学校への寄付を思いつく。彼女は積徳

の意味をスームシーに次のように語っている。

[...] お祖母様が王宮に参内するために着付けを手伝った際に、お祖母様の持つラーマ五世勲章に目が留まりました。その勲章の中には「一族を守り、繁栄させよ (ตั้งใจบำรุงตระกูลวงศ์ให้เจริญ)」と書いてありました<sup>32)</sup>。その時から、少しずつ私たち女性はそうあり、そうすべきものと考えようになりました。つまり、一族を守り、繁栄させるものと。しかし、私にはできたとしても子孫のために少しずつ積徳 (タンブン) をするぐらいです。[中略] 3月 (仏歴 2495 年)<sup>33)</sup>、姪が新聞を読み聞かせてくれたことには、スームシーさんが耳の聞こえない人のために学校をつくったが、庶民の学校の一部屋で教えなければならないことを知りました。そこでサヴィアンさんと呼んで、スームシーさんに、ろう学校を作るためにこの家屋を差し上げたいがどうすればよいのか、相談にやらせました。スームシーさんは同じタイ人でもあるし、信頼できる仕事をする人だと信じておりましたので、私も年老いましたから、ここに学校を建てて頂き、スームシーさんと一緒に事業に参加させて頂きたいと。そして、すぐに積徳させて頂くことを希望いたしました<sup>34)</sup>。

このスームシーによる聞き取りの記述から読み取れるのは、トーの寄付の最大の動機は、多くのタイの女性貴族がそうであるように、一族の繁栄を願うための寄進であるという点である。トーはタイ貴族女性のあり方を、偉大な王として名高いラーマ五世が創設した勲章の中に書かれた題辞である「一族を守り、繁栄させよ」として示している (写真 8)。つまり、トーはろう学校への寄進を子孫のために徳を積むことと解釈し、ラーマ五世の教えに従い、昔ながらの貴族女性の積徳の伝統文化の一端として行っている。そこにはタイ仏教において有徳僧を徳を生み出す福田と見なして女性たちが寄進していくように、ここでは王族血脈を持つ貴族の一人であるスームシーを福田と見なして寄進をする伝統的な女性貴族の姿が見える。



写真 8 : ラーマ五世勲章<sup>35)</sup>



では次にスームシーの解釈を見ていくと、トーの行為をタイ社会の近代化を受け入れようとする古き良き貴族女性の積徳として理解しようとしている。スームシーはトーの寄進を宗教のために寄進するのではなく、ろう学校という社会事業に寄進したという点において新しさを見出している。この点からスームシーはトーを「新しい思考を持つ古い女性(สตรีสมัยเก่าผู้มีความคิดสมัยใหม่)」<sup>36)</sup>と評した。

(トーは)昔気質の人であった。ラーマ五世期の古きよき人のままで、このラーマ九世期まであり続けた。新しい時代の人びととの考え方の違いを受け入れることを自然なことと心得ていた。なぜなら環境も状況も(昔と)ずいぶんと変わってしまったためである。ラーマ五世期であれば、カーやタートといった使用人にかしずかれていたであろうが、ラーマ九世期には貴族は監督の場から降り、自分でご飯を炊かなくてはいけなくなったのだ<sup>37)</sup>。

トーは実に一族に忠実で、高価なものよりも名誉を重んじる人だった。彼女は歴史的な価値を持つものを測る眼を持ち、現在、市場のいかなる高価なものよりも、ずっと高貴な心性とつながっていたのである<sup>38)</sup>。

スームシーは、トーはラーマ五世期の古き良きタイ女性が尊んだ名誉、歴史的価値や心的価値を大切に、貨幣よりも重要な価値があることを知っている人であったと評価している。また他方においては、ろう教育という新しい社会事業に対する理解を示す柔軟さがあることを讃えている。スームシーは、トーの一族の名誉という動機を、さらに新しい価値を持つ社会事業への理解と協力であったと解釈を拡張していると言える。

さらにライアットはトーの寄付を国家社会政策的な意味で再解釈を行っている。1952年タイ国ろう者支援協会開設のあいさつでライアットは、トーの寄付について言及し、次のように述べている。

私はこのような(ろう者への)教育を行おうとする皆様といられることに感激に堪えません。加えて、思うには、ろう者への教育は功德を積むという効用があるだけではありません。国家の経済力を強化するためにも役に立つのです。なぜなら今言ったような人びと(ろう者)がもし教育を受けることができたのでありましたら、自立して生計を立てることができ、得た利益は税金として政府に納めることができるからです<sup>39)</sup>。

ライアットの解釈では、トーのろう教育への寄付の意味は、徳を積むこと、一族の名声をあげることに以上、ろう者を労働力に代え、国家の発展に寄与できることにありと述べている。ライアットの言い方はあまりに国家主義的で、功利的に過ぎるきらいがあるが、ろう者

教育を慈善活動から、国民経済的に目的を持つ社会事業へと転換させようとしている動きとして見る事ができる。

この考え方は、ライアットが戦前から行ってきた女性・社会運動の方向性と軌を一にする。ライアットは1942年に政府の国家文化委員会女性文化局の局長として就任し、国家の発展に寄与するために女性の社会進出に取り組んでいた。女性の社会事業分野への活用は、ライアットの方針の一つであったとみられる。タイ国ろう者支援財団創設と時期を同じくして、1952年、ライアットは女性文化局の下に障がい者支援が含まれるソーシャルワーク教育機関設立委員会を設立した。さらに女性文化局の監督下で、1953年にソーシャルワーク研修所を創設し、1年間のカリキュラムでソーシャルワーカーの育成を行った<sup>40)</sup>。この研修所自体は女性に限定するものではないが、女性文化局の下部機関となっていることから、社会事業に女性の力を活用しようとする意図が読み取れる。また研修所には、オーストラリアから国際連合国際児童緊急基金(UNICEF)に所属するソーシャルワーカーであったマリー・E・デイヴィッドソン(Mary Eileen Davidson, 1909-2007)を女性技師として招聘した<sup>41)</sup>。研修所は5年間運営されたが、1957年には解散し、1954年に創設されたタマサート大学社会福祉学部<sup>42)</sup>に発展統合された。

以上のように、トーの寄付は、本人の意思以上に様々な関係者によって再解釈されている。現在もトーは国立セートサティアン校のろう教育の庇護者として尊敬を受けており、女性の慈善活動と国家事業がうまく融合した事例として更なる女性貴族の寄付を集める意味を持っている。

さらに女性貴族のろう教育へ関与は、女性王族の慈善事業も引き付けている。タイ王室の歴代の女性王族もまた、ろう者教育に対して多大な庇護を与えている。1964年8月12日にはシリキット王妃がタイ国ろう者支援財団に比護を与えている<sup>43)</sup>。その後、娘のシリントーン王女もたびたびろう学校を訪問しており、1983年にはセートサティアンろう学校を、さらに1991年6月12日には新館ソートシリントーン館の落成式典に訪問している<sup>44)</sup>。男性王族の訪問がないところを見ると、このような障がい者施設への訪問といった慈善色の強い社会事業部門は、女性王族の役割として認識されていると見なすことができる。

#### 4. 支援と自立の狭間に立つろう者

以上の議論で見た来たように、タイのろう教育は女性貴族たちの支援と比護を受け、さらに国家の社会事業政策と合流することにより発展していった。この成功によって、ろう教育に対して、国家予算が割り当てられて組織化が進み、タイ全国へと展開してゆくことになった。

また他方でスームシーのもとに集まったろう学生たちのなかには教育を受けた後、社会で働くものが現れた。ろう者の多くは健聴者の補佐職にあり、地位は低いものではあったが、徐々にろう者の存在感を増してゆくことになった。ろう学校においても、授業や寄宿寮の運

営を手話でサポートをする職員や補助教員として働く人が生まれていった<sup>45)</sup>。そういったろう補助教員たちとろう学生たちは、学校を中心に手話で繋がるろうコミュニティを生み出し、被支援者として無力化されるのではなく、自身で社会的地位の向上を目指し、自立を求めるようになっていった<sup>46)</sup>。

このような教育を受けたろう者の増加に伴い、まずは全国でろう学校の設立が相次ぎ、領域的拡大が行われた。1961年5月30日、国内2校目のろう学校としてバンコク都サートーン地区にトゥンマハーメークろう学校(โรงเรียนสอนคนหูหนวกทุ่งมหาเมฆ、現โรงเรียนโสตศึกษาทุ่งมหาเมฆ)が開学した。1960年代末になると地方部にもろう学校が開校した。初めての地方ろう学校は、1968年に開学した東北部のコンケン県ろう学校である<sup>47)</sup>。その後、1969年北部ターク県ろう学校、1973年南部ソクラー県ろう学校、1977年北部チェンマイろう学校と新規ろう学校の開校が続いた<sup>48)</sup>。さらに1990年代にもろう学校が増設された。1991年南部ナコーンシータマラート県ろう学校、1993年中部プラチュワップキーリーカン県ろう学校、1995年東北部ローイエット県ろう学校が開校した<sup>49)</sup>。1996年にナコーンパノム、ベッチャブーン、プラチンプリー、カーンチャナブリー、チャャブーンにもろう学校が開校した<sup>50)</sup>。現在もお全国でろう学校の開校が進められている。

また同時にろう教育の高度化も進展した。ろう初等教育の拠点は、スームシー以来の伝統を持つ国立セートサティアン校であったが、1992年に高等教育の拠点としてマヒドン大学の一学部としてラーチャスダー校が開設され、1994年に授業を開始した<sup>51)</sup>。ラーチャスダー校は現在タイにおけるろう者の大学レベル教育を担う教育・研究機関となっている。

このようにタイ国内でろう教育のすそ野が広がった一方で、ろう教育組織の階層化が意識されるようになり、健常者である教職員とろう職員・学生間の格差が問題となっていった。例えば、授業では正規教員たちの手話の能力が低かったこともあり、口話を中心とした口話法や、手話や指文字などを補助的に用いることを認めたトータルコミュニケーションによるアプローチが用いられていた。それに対して手話が流暢に使えるろう職員や年長のろう学生は、立場の低い授業補助として、年少の学生たちに手話を用いて正規教員の意図を解説し、課外活動もまた彼らが世話することで運営されていた<sup>52)</sup>。さらに手話が階層化し、学校で習う公式手話と、ろう者たちが学校ごとに生み出していった手話の間に階層が生まれた。学校の公式手話には権威が与えられ、ろう者たちの間で自然発生的に生まれた手話は、時にろう学校で使用を禁止されることもあったという<sup>53)</sup>。ろう者側には自らの手話を擁護する力はなかった。

しかし、ろう学校で学んだろう学生たちはろう学校の教員や他の団体からの協力を得つつ、次第に自立性を強めていくこととなった。まずタイのろう者はセートサティアン校などの卒業生を中心として自助団体を形成していった。1969年にセートサティアン校の一室に同窓会事務所を設立した。発足時にはセートサティアン校、トゥンマハーメーク校、コンケン校、ターク校などの93名の学生が加入した<sup>54)</sup>。

さらにセートサティアン校の同窓会組織から独立し、全国ろう者間で協力していく体制へと1980年代から組織整備がなされていった<sup>55)</sup>。これに伴い、財政もろう者による自立を目指し、豪州やカナダといった外国政府からも支援を取り付けた<sup>56)</sup>。特に1979年、ガムボン・スワンナラット(กำพล สุวรรณรัตน์)が会長であった時に、米国のろう教育研究者チャールズ・ライリー(Charles B. Reilly)が米国国際開発庁(USAID)から支援を取り付け、手話研究や職業訓練、職業創出などを支援した<sup>57)</sup>。その後、1981年、事務局をセートサティアン校からスクムウィット地区に移転し、1984年には全国ろう者協会(National Association of the Deaf in Thailand: NADT)として団体登録が認められた<sup>58)</sup>。さらに1993年に事務局をサートン地区、シーロム地区へと移転し、最終的に所在地をスワンルワン地区に決定した<sup>59)</sup>。

またろう者自身によってタイ手話の研究、辞書の編纂事業が行われた。タイは広大な国土を持つために地域方言を持っている。またろう学校の地方への拡大に伴い、ろう学校ごとに新たな手話を生んでいった。そのために相互に共通理解が可能となるようにタイの標準手話の辞典をつくり、普及することが企画された<sup>60)</sup>。この事業を主導した研究者がトゥンマハーメーク校のろう者女性教師マーンファー・スワンナラット(มานฟ้า สุวรรณรัตน์)であり、タイ手話辞典『バタースクロム・パーサームタイ(ปทานุกรมภาษามือไทย, *The Thai Sign Language Dictionary*)』を執筆した(写真9)<sup>61)</sup>。しかし、女性貴族ではなく、また後ろ盾のないろう女性教師の活動は多くの困難に直面した。当初、学校や教育省は、この辞典の重要性が理解できなかったため、マーンファーの研究計画に対する助成金がつかなかった。そこでマーンファーはタイ政府からの支援をあきらめ、ライリーと米国の協力の下で3年間かけて執筆し、1986年に第1巻、1990年には増補改訂版となる第2巻を完成させた。この2冊本は、日本の全日本ろうあ連盟と日本郵便局ゆうちょボランティア貯金(世界の人びとのためのJICA基金)の支援を受けて出版された(写真10)。



写真9：マーンファー・スワンナラット  
(มานฟ้า สุวรรณรัตน์, 1952-1989)<sup>62)</sup>



写真 10：タイ手話辞典『パターンクロム・パーサームータイ  
(ปทานุกรมภาษามือไทย, *The Thai Sign Language Dictionary*)』<sup>63)</sup>

貴族階層に属さない一般のろう補助教員がろう教育事業に参加することは非常に難しい。マーンファーの夫であり、全国ろう者協会会長であったガムポンは、教育省のマーンファーの手話辞書編纂事業への不理解について、回想録に以下のように記述している。

教育省に彼女の辞典を提出した時、投げ返された。彼ら役人にとっては何の価値もないゴミのようなものであったのだろう<sup>64)</sup>。

このタイ手話辞典は手話話者であるろう者自身が編纂するという点において画期的であった。しかし、ろう者は支援される対象であるとの先入観が強く、支援者たる女性貴族や健常者である教員や官僚の眼からは、ろう者の研究能力は認めがたいものとして認識されていた。ガムポンは政府がろう者に対して「福祉的である」こと、つまり慈善としての施しの教育がろう者の無力化の事態を悪化させたと指摘する。加えて、ろう者自身もその立場に甘んじて、寄付者や庇護者の顔色を窺っていた状態にも問題であったとして、自省を含めて次のように批判している。

政府は 1943 年から 1957 年にかけて障がい者の学校の建設を始めた。ちょうど盲協会ができた頃であるが、学校はまだ福祉的な意味合いで教えられていた(สอนแบบสงเคราะห์)。つまり、まだ(学生たちが)何でもできる可能性を持っている

という信念を十分に啓蒙していなかった。子どもたちを啓蒙すべき教員がもっと頑張るべきであった。しかし、寄付者や校長に付度する組織の中に留まってしまった。そのため子どもたちが何をしようにも、先生にすべて伺いを立てなければいけなくなってしまっている。わたしはこれこそが問題だと言いたい。つまり福祉的である (แบบสงเคราะห์) ということだ<sup>65</sup>。

ここでは「福祉」という国家社会事業の枠組みの中で、ろう者が一方的に施しと管理を受ける被支援対象として役割が固定されてしまう問題を指摘している。そうなってしまうと、政府の制度や社会認識としても、ろう者の自立性が想定されず、無力化されてしまうことをガムポンは批判している。そして同時にガムポンを含めたろう教員自身も子どもたちに自らの可能性を教育しなかったということで、「福祉」という名の下で、ろう者を無力化してしまう体制に加担してしまったことを反省しているのである。

一方で、施しを与えようとする女性貴族グループには入らず、マーンファーはそこから自立して自らの言語である手話辞典を達成したことは、タイにおけるろう者と健常者の関係性に変化を与えるものになった。マーンファーの仕事が国連機関から表彰を受けるなど国際的に認められるようになると、教育省でもその仕事を認めるようになったのである。マーンファー自身は表彰後、1989年に37歳で病気のために亡くなったが、最終的には1999年8月17日に教育省は省令により手話をタイの公用語として定める決定をし、ガマラーの『タイ指文字表』とマーンファーの手話辞典全二冊を参考書として指定した<sup>66</sup>。2000年にはろう学校における必修科目にタイ手話を指定し、マヒドン大学ラーチャスダー校に手話通訳者を養成するコースを設置した。

現在、タイでは手話を基盤言語とした教育が模索されている。タイのろう教育において、それまでの手話や指文字などを補助的に用いることを認めたトータルコミュニケーションによるアプローチから、手話を第一言語として扱うバイリンガルろう教育<sup>67</sup>への比重の変化が起こっている<sup>68</sup>。タイで最初にバイリンガルろう教育を導入したラーチャスダー校では、地方ろう学校へも教育支援を続けており、ナコムパトムろう学校などでバイリンガルろう教育を導入し、タイ手話によるタイ語の教育を行っている<sup>69</sup>。その結果、他のろう学校に比べて学生のタイ語の理解度は高まったという<sup>70</sup>。それ以降、2020年の段階でラーチャスダー校のバイリンガルろう教育のプログラムに参加するろう学校は全国21校に増加しているという<sup>71</sup>。現在は他の大学教育にも広がり、スワンドゥシット大学の大学教育においてもバイリンガルろう教育が行われている。

以上のように、タイの女性貴族たちの生み出した慈善や国家事業としてのろう教育支援活動は、ろう者に教育機会を与えることに寄与しつつも、同時にろう者とその支援者との間に、被支援者と支援者という硬直的な関係を生み出してしまった。つまり篤い庇護を与えつつも、その一方でろう者を無力化して、社会に貢献する能力のない、一方的に支援を受け取

り、服従する存在にしてしまったのである。それに対して、ろう者たちはろう学校で育成された知識や人間関係を活用し、ろう者自身を組織化し、また米国や日本など海外の寄付を集めることによって、より自立した関係性を作り出そうとしている。

## 5. おわりに

タイ社会において僧や社会的な弱者に対して施しを行い、功德を積む慈善行為は上流階層の女性たちの模範的な行為とされてきた。一方で国家の発展が進むと国家による福祉の充実が目指されるようになった。しかし、タイ政府にとって利用可能な資源は限られていたために女性慈善行為の動員と取り込みが行われ、この女性たちの慈善行為はタイの社会の中で個人の積徳を越えて、社会を支える社会的、政治的な意味が付与されていった。それと同時に女性たちもまたろう者への社会事業に関与することで社会への参画を求めていったのである。結果的に、ろう教育の面から、女性貴族ネットワークの強固な積徳の枠組みは、今なお国家社会事業としてろう教育を推進する原動力となっている。

しかし、また同時にろう教育の発展は、ろう者自身がその女性貴族の慈善と社会事業の融合した体制の変革を求める方向へと進んでいる。慈善行為と国家社会事業の対象として無力化されていたろう者の中には、ろう教育によって培った能力を用いて、自らの自立を求めて活動を行うものが現れている。ろう自身の組織化を行い、海外からの寄付や協力を活用し、国際的ネットワークの中で新たなろう者とその支援者との関係性を模索している。

## 付記

本研究は、科研基盤研究(B)「手話のオラリティとアジアろうコミュニティでの社会貢献への応用」(18KT0034 代表：斉藤 くるみ)による研究成果の一部である。

## 註

- 1) バーンコー手話は、バンコク近郊ナコーンパノム県バーンコー集落で独自発達した手話言語である。住民の多くがろう者であるためにその地域内での自然手話が独自に発展したことで注目されている (Angela M. Nonaka, The Forgotten Endangered Languages: Lessons on the Importance of Remembering from Thailand's Ban Khor Sign Language, *Language in Society*, (33), 2004, 743.)。
- 2) ギャローデッド大学 (Gallaudet University) は、1864年に米国ワシントン D.C. に創設されたろう者の大学であり、大学内では米国手話 (American Sign Language: ASL) が公用語となっている。世界中からろう者のリーダーが集まり、手話で学んでいる。1988年にデフ・プレジデント・ナウ学生運動が起こり、以降ろう者が学長に就任している。
- 3) 同上、742頁。
- 4) 加藤三保子・本名信行「タイのろう者と手話」『手話コミュニケーション研究』第59号、2006年3月、70-77頁。
- 5) 葬式本 (หนังสืองานศพ) とは、タイの上流階層の葬儀の際に、故人を偲んで経歴や業績をまとめて頒布される書籍のことである。その書籍には故人の業績や趣味に関わる著名な学者や文人が扱

- 稿することも多く、古典文芸、論文、経典、日記、料理レシピなど多岐にわたる文章が収録される。ラーマ五世治世にはすでにあり、当時出版物の少なかったタイにおいて貴重な資料となっている。現在、タイ国立図書館が収集を行っているほか、タイ国外の大規模コレクションとしては、京都大学東南アジア地域研究所にある4,000冊のチャラット・コレクションが知られている。
- 6) ガセームシー家では、スームシーを含めた一族の女性は高い教育を受けており、スームシーの姉、ソンシー・ガセームシー(พญ.ม.ร.ว.สังศรี เกษมศรี, 1909–2009)は、タイで初めて医学教授となった女医であった(Sanchai Saengwichian, “Sattracan Phaetying Momratwong Songsi Ketsingh” *Weibanthuek Sirirat*, Kanyayon-Thanwakhom, 2552, Pithi 2, Chabapthi 3, 2009, 252)。またソンシーの夫、ウワイ・ゲトゥシン(อุทัย เกตุสิงห์, 1908–1990)はシリラート病院の医学教授である(同上)。
  - 7) Poonpit Amatyakul, Maliwan Thammasaeng and Prayat Punong-ong, *Sectoral Survey on Special Education in Thailand: Education for Children with Disabilities*. Salaya, Nakorn Prathom, Thailand: Mahidol University Press, 1995, 9.
  - 8) Mulanithi Anukhro Khonhunuak, “Prawat Khwampenma Mulanithi Anukhro Khonhunuak Nai Phraboromrachinupatham” in Mulanithi Anukhro Khonhunuak Nai Phraboromrachinupatham, 2022. Retrieved from <https://www.deafthai.org/history/> (Accessed on 14 January, 2022).
  - 9) Poonpit, et al.、前掲書、9頁。
  - 10) Chamnan Mainoi, “Kansuesan Phasamuethai Khong Khonhunuak Nai Chumchon,” 日本社会事業大学社会福祉学部斉藤くるみゼミワークショップ「タイ国におけるろう者当事者支援と研究の現状」、発表資料、2014年、日本社会事業大学清瀬キャンパス教学A棟A302教室2014年7月12日開催。
  - 11) Poonpit, et al.、前掲書、9頁。
  - 12) Rongrian Setthasathian, “Thamniap Phuborihan,” 2014. Retrieved from <http://www.setsatian.ac.th/2015/the-executive/> (Accessed on 20 August, 2023).
  - 13) Laiat Phibunsongkhram “Khamklao Khong Thanphuying Laiat Phibunsongkhram Nai Nganphithipoetpai Munlanithi Anukhro Khonhunuak,” in Kromsamansueksa Krasuangsueksathikan, *Khunyingto Noranetibanchakit Lae Kansueksa Khong Khonhunuak*, Bangkok: Kromsamansueksa Krasuangsueksathikan, 1955, 32.
  - 14) 同上、32–33頁。
  - 15) 同上。
  - 16) Mulanithi Anukhro Khonhunuak, “Prawati Khwanpenma”、前掲ウェブサイト。
  - 17) Samnakngan Lekhathikan Saphaphuthaenratsadon Samnakngan Amnuaikan Nangsue Ratthasaphasan, *Samutphap Samachik Ratthasapha 2475–2502*, Bangkok: Samnakngan Lekhathikan Saphaphuthaenratsadon, 1959.
  - 18) 同上。
  - 19) Poonpit, et al.、前掲書、9頁：“Khunying Kamala Krairoek To. Cho., Tho. Mo., To. Co. 2457–2543.” *Anuson Nganphraratchathan phloengsop khunying Kamala Krairoek na Menwatthathong Wanangkhan thi 9 Mokkarakhom 2544*. Bangkok: —, 2001.
  - 20) Rongrian Setthasathian, 前掲ウェブサイト。
  - 21) Maliwan Thamasaeng, “Prawat Kansakot Niwmue Nai Prathetthai,” 2018. Retrieved from <https://www.deafthai.org/wp-content/uploads/2018/05/%E0%B8%9B%E0%B8%A3%E0%B8%B0%E0%B8>



%A7%E0%B8%B1%E0%B8%95%E0%B8%B4%E0%B8%81%E0%B8%B2%E0%B8%A3%E0%B8%A  
A%E0%B8%B0%E0%B8%81%E0%B8%94%E0%B8%99%E0%B8%B4%E0%B9%89%E0%B8%A7%E  
0%B8%A1%E0%B8%B7%E0%B8%AD.pdf (Accessed on 14 January, 2022)

- 22) Chamnan、前掲書。
- 23) 同上。
- 24) 同上。トータルコミュニケーションについて、田上隆司は「アメリカで提案され、普及したものを、日本でも借用しているもので、口話や手話・指文字など、全ての(total)方法を活かして使うという意味である」(田上隆司「トータルコミュニケーションについて」『リハビリテーション研究』第50号、1985年、9頁)と定義している。日本では1970–1980年代に普及し、1890年代より口話以外の使用を認められていなかった日本のろう教育において、口話以外にも日本語対応手話、指文字、書記日本語などを用いて教育が行われた。他方で、あくまでも健常者の言語である日本語を重視し、手話は補助と位置付けられた。
- 25) Mulanithi Anukhro Khonhunuak, “50 Pi Kandoenthang Khong Nangsue Phasamuethai” in Mulanithi Anukhro Khonhunuak Nai Phraboromrachinupatham, 2021. Retrieved from <https://www.deafthai.org/50yearstslbooks/> (Accessed on 24 August, 2023).
- 26) Charles B. Reilly and Nipapon Reilly, *The Rising of Lotus Flowers: Self-Education by Deaf Children in Thai Boarding Schools*, Washington, D. C.: Gallaudet University Press, 2005, 69.
- 27) 同上、86頁。
- 28) Kromsamansueksa Krasuangseuksathikan, *Khunyingto Noranetibanchakit Lae Kansueksa Khong Khonhunuak*, Bangkok: Kromsamansueksa Krasuangseuksathikan, 1955.
- 29) セートサティアン財団とは、セートサティアン校の運営法人であり、寄付者トーの家名チョーテックサティアンと夫の家名セートブットを合わせて名付けた(同上)。初代財団長には、モムルワン・ピン・マーラーグンが就任した(同上、13頁)。
- 30) 同上。
- 31) 原文では「子ども(実子)が全くいなかったなので、女の子を数多く養っていた(ไม่มีลูกเลย จึงเลี้ยงเด็กผู้หญิงไว้หลายคน)」(同上、8頁)と記載されている。この書き方において法的な養子関係は不明である。そのため法律用語である「養子」ではなく、「養い子」と訳した。タイの習俗として、事情のある母親が実子を親や親戚に預けることはよく見られる。
- 32) ラーマ五世勲章は1874年創設された勲章であり、「我ら一族を守り、繁栄させる(เราจะบำรุงตระกูลวงศ์ให้เจริญ)」と記載されている。トーの語りにおける題辞とは若干異なる。
- 33) 仏暦2495年は、西暦1922年である。
- 34) Soemsi Kasemsi, “Satri Samaikao Phumi Khwamkhit Samaimai,” in Kromsamansueksa Krasuangseuksathikan, *Khunyingto Noranetibanchakit Lae Kansueksa Khong Khonhunuak*, Bangkok: Kromsamansueksa Krasuangseuksathikan, 1955, 10–11.
- 35) The Collection of Nkoromo, “The Most Illustrious Order of Chula Chom Klao,” in Facebook, Retrieved from [https://www.facebook.com/photo/?fbid=869971960207606&set=pcb.869975906873878&locale=th\\_TH](https://www.facebook.com/photo/?fbid=869971960207606&set=pcb.869975906873878&locale=th_TH) (Accessed on 26 February, 2024).
- 36) Soemsi、前掲書、6頁。
- 37) 同上、6–7頁。
- 38) 同上、13頁。
- 39) Laiat、前掲書、32–33頁。

- 40) Renu Chotdilok, “Thanphuying Phukotang Kansueksa Sangkhomsongkhro Nai Prathetthai,” in *Anuson Nai Ngansadetphraratchadamnoen Phraratchathan Phloengsop Thanphuying Laiat Phibunsongkhram Po. Co., Mo. Wo. Mo., Po. Cho., Na Men Wat Phrasimahathatworamahawihan Wan Angkhan Thi 14 Singhakhom 2527*. Bangkok: Sunkanphim, 1984, 216.
- 41) 同上、220 頁。
- 42) 同上。
- 43) “Khunying Kamala”、前掲書。
- 44) 同上。
- 45) Reilly & Reilly、8 頁。
- 46) 同上、10 頁。
- 47) Poonpit, et al.、前掲書、9 頁。
- 48) 同上。
- 49) 同上、10 頁。
- 50) 同上。
- 51) 加藤・本名、前掲書、75 頁。
- 52) Reilly & Reilly、7-8 頁。
- 53) Suphontham Mongkhonsawat, “Khon Nai Lokngiap Kap Ratthai: Khwamsamphan Phaitai Kancatkansueksa Phiset Phuea Khonhunuak Tangtae Pho So 2494—Patchuban.” *Sammana Wichakan Radapchat Dan Khonphikan Khrang Thi 9 Pracham Pi 2560*. Sun Ratkan Lae Khonwensantoe Khet Laksi Krungthep, 26-27 July, 2017, 268.
- 54) Samakhom Khonhunuak Haeng Prathetthai, “Khwampenma Khong Samakhom,” 2019. Retrieved from <https://nadt.or.th/pages/history.html> (Accessed on 3 July, 2022).
- 55) 同上。
- 56) Suphontham、前掲書、270 頁。
- 57) 同上、271 頁。
- 58) 同上；タイ国ろう者協会は、1984 年に国立セートサティアン校同窓会が中心となり設立された（加藤・本名、前掲書、70 頁）。協会事務局は政府や個人からの寄付金と宝くじの販売収益によって運営されている（同上）。さらにタイ国ろう者協会は全国四地方に支部を持っている（同上）。さらに全国 11 か所に小規模のデフクラブの設置し、地方のろう者の活動拠点となっている（同上）。
- 59) Suphontham、前掲書、271 頁。
- 60) 加藤・本名、前掲書、72 頁。
- 61) Suphontham、前掲書、268 頁；マーンファーは一般家庭の出身で、セートサティアン校とトゥンマハーメークろう学校を卒業後、ポチャーン単科大学職業訓練課程を 3 年間で修了している（*Kamphon Suwannarat Phalanghaphkhluean Haeng Lok Ngiaip Nai Sayam*, Bangkok: Munlanithi Songsoem Lae Phatthana Khonhunuak Thai, 2010, 89.）。
- 62) Kamphon Suwannarat *Manfa...Anyamani Haeng Lokngiap: Huachai Sangmai Hai Nuak*. Bangkok: Munlanithi Songsoem Lae Phatthana Khonhunuak Thai, 2005.
- 63) Manfa Suwannarat, Anucha Ratanasin, Wilaipjon Rungsithong, Anderson, Lloyd, and Owen P. Wrigley, *Pathanukrom Phasamue Thai: Chabap Prapprung Lae Khayai Phoemtoem*, Bangkok: Samakhom Khonhunuak Haeng Prathetthai, 1990.

- 64) Suphontham、前掲書、268 頁。
- 65) 同上。
- 66) 同上、269 頁。
- 67) バイリンガルろう教育とは、第一言語として手話による教育を行い、その国の国語を第二言語として教育していくものである。
- 68) Sasiwimol Kongsuwan and Benjamaporn Ruachai “Kanrian Kanson Samrap Khonhunuak Nai Prathetthai: Saphap Panha Rupbaep Lae Krabuankanson Baepsongphasa.” *Warasan Mangraisan*, 8(1), 2020, 1-14.
- 69) 同上、10 頁。
- 70) 同上。
- 71) 同上。